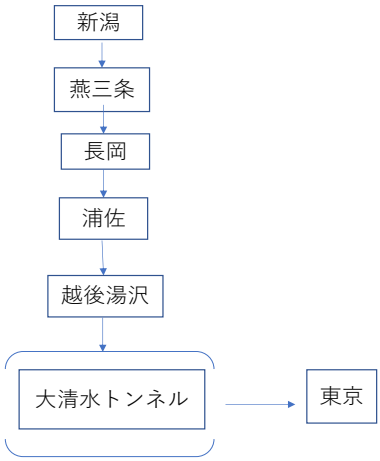
旅する女

南風　こまち

上越新幹線『Maxとき３１０号』時刻表・路線図（概略）

新潟	８：００	発
燕三条	８：１２	発
長岡	８：２３	発
浦佐	８：３６	発
越後湯沢	８：４９	発
東京	９：５５	終着



第一話　雪国隧道

暗い部屋の中。

仕掛けを終えた俺は、そっと笑いを噛み殺した。

＊　　＊

３月になった。

秋田駅東口から徒歩二分。小さなハイツの一階に『居酒屋　かま田』は軒を構えている。カウンター席が幾つかあるだけの小さな店だ。

夜。常連さんが引き戸を開けた。

「いらっしゃい！」

「いらっしゃいませ」

釜田さんと私の声が店内に響く。週の中日の夜遅くということなのか、珍しく店は開店休業状態だった。

「どうも、ご無沙汰しています」

常連さん……剱さんは肩の雪を払いながら店に入る。

「事故の方は？　一段落したのか？」

「ええ。運輸安全委員会の人からの聞き取りも終了しました。とりあえずはですがね」

「脱線事故の話を聞いたときは慌てましたよ。けが人が出なくて良かったですけれど」

先日の３月２日。剱さんの職場である秋田新幹線で脱線事故が発生した。その日の剱さんは数本前の列車の運転担当で無事だったが、気をもんでいた姿を覚えている。

「別に僕が乗務していたわけではないんですけれどね」

剱さんの優し気な垂れ目が、眼鏡越しに私を見る。

雑談もそこそこに剱さんはカウンター席に座る。

「そうだな…牛バラとアスパラの炒め物と、焼きトマト。あと鶏の唐揚げをお願いします」

「酒は？」
厨房の奥から釜田さんのだみ声が響く。
「とりあえず生をお願いします」
「おう。碓氷！　生一丁！」
「はい！」
剱さんはいつものように箸置き代わりの落花生の殻を割り、中身をつまむ。
このような光景が日常になってからもうすぐ二年になる。過去から目を逸らすようにがむしゃらに働いてきた。
「コラ、碓氷！　仕事しろ！」
トマトを焼き始めた釜田さんの怒鳴り声に私は首をすくめ、慌てて冷やされたジョッキとお通しの皿を手に取った。いぶりガッコのいい匂いが鼻をくすぐった。

＊　　＊

剱さんが焼きトマトを堪能している頃。また引き戸が開き、雪と共に誰かが入ってきた。
「いらっしゃい！」
「いらっしゃいませ」
「こんばんは。予約していた霧島です」
「お待ちしておりました。こちらです」
オールバックの小男を剱さんの横に通す。剱さんがただでさえ大男のため、余計に小さく見える。
「どうも、剱さん」
「ああ、霧島さん。すみませんが、お先にやらせてもらっていますよ」
「いえいえ」
「注文は？」
厨房の奥で鶏の唐揚げと格闘している釜田さんが聞いた。糸のように細い目がたった二人の客を見る。
「山芋焼きと、肉巻き蓮根を」
「刺身盛り合わせと『高清水』の熱燗をお願いします。あとはじゃがバターを」
「せっかく秋田に来たので、僕にも同じ酒を」
「かしこまりました。オーダー入ります！」
「あいよ！」
俄然、忙しくなってきた。釜田さんの好みなのだろうか、この店はやけに芋料理が多い。
「霧島さん、東京の方でしたっけ？」
「ええ、今は国交省に勤めているので。ですが元々の地元は高知です」
「そうなんですか。言われてみると、少し西の方の訛りがありますね」
「失礼します。『高清水』の熱燗と鶏の唐揚げです。熱いのでお気をつけ下さい」
「ああ、碓氷さん。これはどうも」
剱さんが頭を下げつつ受け取る。
「まあまあ剱さん、まずは一杯」
「どうもどうも」
お互いに注いで注ぎ返して、お猪口を合わせる。
「やっぱり旨いな、秋田の酒は……さっきの店員さんは知り合いですか？」
「碓氷さんのことですか？　ええ。僕がこっちに転勤する前に出会いまして。いろいろあってこの店を紹介したんですよ」
私は肉巻き蓮根を焼く手をそっと止め、聞き耳を立てる。ちりちりと警戒心に火が付く。
「へえ……剱さんも隅におけませんね」
「それで？　今日は何のお話でしょうか？　事故の件についての聞き取りは終わったはずですが」
「それとは別件です。仕事の話は勘弁してください、せっかくプライベートやのに」
剱さんが上手く話を逸らしてくれた。再び手を動かす。蓮根を焼く間に山芋を微塵切りにしなくては。
「事故の件でないとすると何でしょうか？」
霧島さんの顔が一気に真剣なものになった。
「実は……剱さんの力をお借りしたいんです」
「僕の、ですか？」
剱さんはわずかに眉を上げた。
「どうやら、訳ありな話のようですね」
「これから話すことは内密に願います。ばれたら僕のクビが飛びかねません」
剱さんは黙ってお猪口を傾け、ちびりと酒を飲んだ。
「約束はできませんね。内容によります」
「……じゃあ、概要だけお話しします。僕の知り合いに警察で働いている人間がいるんですが、そいつが担当しているある事件の捜査が難航しているんです」
事件、という言葉に私は少しだけ神経をとがらせた。
「その内容を話すから、代わりに僕に謎解きをしてほしいってことですか？」
「まあ……つまりそういうことです」
「警察にも分からないことが僕に分かるとはとても思えませんが」
「鉄道絡みなら剱さん向きかと思いまして」
「鉄道絡み、と言われましてもねぇ……確かに、僕は生粋の鉄ちゃんですけれども」
「他に頼るあてが無いんですよ、剱さんの他に」
剱さんはため息をついた。
「ちなみに……事件、と言いましたね？　どのような事件ですか？」
「殺人です」

その言葉に、私は凍り付いた。

＊　　＊

先月末のこと。東京湾で男性の死体が発見された。男性の名前は白馬淳一、丸の内の商社に勤めるビジネスマンで、数日前から行方不明になっていた。死因は溺死で、自殺と殺人の両面から捜査を始めることになった。小柄な死体だった。

「この事件の担当は私達になったわ。沖君、よろしくね」

「よろしくおねがいします、八雲警部」

沖は私に頭を下げた。私達はタクシーに乗り込み、警視庁を後にした。向かうは丸の内だ。

まず事情聴取したのは白馬の上司だった。大山眞喜雄という男で、薄くなった頭を下げながら私達に応対してくれた。役職は課長だという。

「貴重なお時間をありがとうございます。早速ですが、本題に入らせてください。白馬氏が遺体で発見される前の被害者の足取りを掴んでおきたいんです。何か白馬氏の行動に心当たりはありませんか？」

「白馬には2月26日から一泊二日で新潟への出張を命じました。彼の部下の信濃と二人で。新潟入りした日に現地の取引先と商談をし、翌朝の新幹線で帰京、まっすぐここに出勤する予定でした。10時半からここで別件の商談を控えていたので」

「確かに、ここからだと東京駅へは歩いて5分くらいで行けますもんね」

沖が合いの手を入れながらメモを取る。

「新潟ですか」

「ええ。ですが、帰京当日の朝に白馬から電話がかかってきました。風邪をひいたため出社できない、今日は休ませてほしい、とのことでした」

「風邪で出社できない？　……その電話をかけてきたのは白馬氏ご本人で間違いないですか？」

「白馬のケータイから着信がありました。酷いガラガラ声で、とても本人のものとは思えませんでしたが、口調などに特に違和感はありませんでしたね。私も了承して、11時からの商談には別の人を担当させました。必要書類が白馬のパソコンから送信されてきたので、商談自体は滞りなく進みました」

「その書類、後で見せてください。電話の録音データなどはありませんか？」

「留守電になっていたわけではありませんしね……無いと思います」

「そうですか……」

声紋を取るのは無理か。私は内心しょげたが、そんな暇は無い。気を取り直して次の質問に移る。

「新幹線で出張に行ったんですか？」

「新潟に行くときは二人ともそうでした。帰りは白馬だけ新幹線でした。信濃は新潟からレンタカーです。帰りの途中に得意先への挨拶回りをするとのことで」

「新幹線……列車名などは分かりますか？」

「さあ……そこまでは把握していません。10時半からの商談には間に合う時間の列車だとは思いますが。白馬の直属の部下の信濃なら知っているかもしれません」

「そうですか。では、信濃氏には後でまた別個に伺いましょう。他に近頃の白馬氏の言動に何か異常はみられませんでしたか？」

最後の質問に大山は首を捻り、そして横に振った。

「ありません。自殺にしろ殺人にしろ、よりによって彼にそれは無いと思います。何も理由が思いつきません」

「被害者の死亡推定時刻は27日の深夜です。念のためにお伺いしますが、その時あなたはどこで何をしていましたか？」

「何をしていたかって……家で寝ていましたよ」

これで大体聞きたいことは済んだ。沖が私に目配せする。私がそっと首を横に振ると、手帳を畳んだ。

「じゃあ最後に、電話の着信履歴と送信されてきた書類を確認させてもらえますか？」

「ええ。こちらへどうぞ」

大山は応接間からオフィスへと私達を案内した。着信履歴と書類を見せてもらう。

「着信は27日の朝7時21分……よくそんな時間に会社にいましたね」

「早朝出社ですよ。仕事が溜まっていたもので。ここ最近仕事仕事で、部署全体が疲弊しているんです。そんな中でも白馬は仕事が早くて助かっていました」

「そうですか。でもその割には随分あっさり病欠を了承しましたね」

「病気ばかりは仕方ない部分がありますからね」

「……企画書の受信時刻が8時52分ですか」

「電話の着信からだいぶ間が空いていますね」

沖の言葉に私は彼の顔を見た。

「白馬氏の携帯電話、それにパソコンは誰か第三者が操作することは可能ですか？」

「白馬は古風な男で、スマホではなく携帯を使っていました。だから今時のスマホのような指紋認証とかパスコードも無いでしょうから、携帯を操作することは可能でしょうね。パソコンも何世代も昔のものを使っていました。さすがにパスワード設定はできたでしょうが、それも誰かに知られたらどうなることやら」

「そんな旧式の機械ばかりでよく仕事をさばいていまし

たね」
沖が驚きの声を挟む。
「ええ。どうやって仕事をしていたんでしょうね……今となっては分かりません。そういや、しばしばバッテリーが上がったと言って騒いでいました」
大山はそう言い、肩を落とした。
＊　＊
白馬の直属の部下、信濃泰正は顔に疲労を浮かべながら応接室に入ってきた。
「信濃泰正さんですね？　お忙しい中、ありがとうございます。早速ですが、元上司の白馬氏についていくつか質問をさせて下さい」
「構いませんが、手短にしてくれたら助かります。白馬先輩が自殺して、その分俺の仕事が増えたんです。白馬先輩が生きている時でさえあっぷあっぷでしたから、今はヤバいんです」
「そうですか……お言葉ですが、白馬氏は自殺と断定されたわけではありません。自殺、他殺両面から捜査をしています」
信濃は少し困惑の表情を見せた。他殺なんて言われたら無理もないだろう。
「では、質問に移ります。信濃さん、あなたは２６日から２７日にかけて白馬氏と二人で新潟に出張したと伺いました。その時の行動をできる限り詳細に教えて下さい」
「分かりました」
信濃は茶を一口啜った。その間に沖がメモを取る準備をする。
「俺と白馬先輩は、２６日朝の新幹線で新潟に出ました」
「何という列車ですか？」
「えーと……ちょっと待って下さい」
信濃はポケットからスマホを取り出した。左手の結婚指輪が鈍く光った。
「『Max とき３０９号』でしたね」
「沖君、時間は？」
「東京を８時２４分に出て、新潟に１０時３７分に着くやつですね」
「そう……お二人とも指定席でしたか？」
「いえ、自由席です。経費削減しろと上がうるさいので」
「なるほど。続けて下さい」
「新潟で商談を済ませた後、ビジホにチェックインしました。そこから二人で飲みに行きました。と言っても、先輩はいわゆる「飲みニケーション」が大好きで酒にもうるさかったので、予め下調べをして行きました。ホテルから徒歩では遠かったので、俺が車で連れて行きました。確か、『福楽』っていう店だったと思います。先輩も満足そうでしたよ。店に行ったのが夜の８時くらい、出たのが１０時……は過ぎていたと思います。ホテルで分かれたんですが、翌朝にマスクをして現れました。酷いガラガラ声で、風邪をひいたんだと一目で分かりました。とりあえず帰りの新幹線の切符だけ渡して、チェックアウトしました。７時半くらいですかね。俺はそこから三条、前橋、熊谷と得意先に挨拶回りを済ませて帰京、ここに一度顔を出してからレンタカーを返しました」
「新潟市内の移動は全部レンタカーですか？」
「ええ。ずっと俺が運転していました。そのレンタカーで帰京しましたしね」
「白馬氏が乗った帰りの新幹線は何号か分かりますか？」
「８時に出る列車があるからそれに乗る、みたいな事を言っていました。指定券を手配したわけでは無いので何号かまではちゃんとは分かりませんが」
私はスマホで上越新幹線の時刻表を調べてみた。見ると、確かに８時丁度に新潟駅を出る『Max とき３１０号』があった。白馬が言っていたのは恐らくこの列車だろう。
「切符やレンタカーの手配は誰がやりましたか？」
「全部俺です」
「白馬氏はだいぶ古風な男だったと伺いました。パソコンや携帯も昔のものをそのまま使っていたとのことですが、古いと色々苦労もあったでしょう。モバイルバッテリーを貸したりしたことはありますか？」
私の後に沖が質問を引き継ぐ。
「ええ、何度もありますよ」
「今回の出張でもそうでしたか？」
「確か……行きの新幹線の車中で貸しましたね。パソコンで仕事をするのに。自分のモバイルバッテリーも使い切ったとか言っていました」
「被害者の死亡推定時刻は２７日の深夜です。その時、あなたはどこで何をしていましたか？」
「えーっと……その夜は吉祥寺に住んでいる友達の家にいました。確認してもらえばわかると思います」
「なるほど。では、後でそのご友人の氏名を教えて下さい。その他、今回の出張に限らず白馬氏に何か変わった様子は見られませんでしたか？」
「うーん……特に心当たりはないですね」
質問も尽きた私達は、お礼を言って応接室を後にした。
＊　＊
霧島さんは事の顛末を大方話し終え、少し油が回った唐揚げの残りを口に運んだ。
「と、いうわけなんです」
「うーん……そうですか」
剱さんも冷めたアスパラ炒めを口に放り込む。釜田さ

んが湯気の立つじゃがバターを運んで行った。
「ほれ、じゃがバターお待ちどお」
「釜田さん、美味しいです」
「当たり前よ。ここの名物だぞ」
「霧島さんもどうですか？　じゃがバター。熱いうちが美味しいですよ」
「頂きましょう」
「失礼します。山芋焼きと肉巻き蓮根です、あとは刺し盛りになります」
「あ、碓氷さん。ありがとうございます」
カウンターの上は俄然賑やかになり、二人の客は揃って舌鼓を打つ。剱さんにお礼を言われた私は、なぜか体が芯から暖まったような気がした。
「その後、捜査はどうなりましたか？」
剱さんはさっそくぶつ切りの蛸に手を伸ばす。
「書類の送信時刻は白馬氏のパソコンと一致しました。パソコンは白馬の自宅に遺されていたのを鑑識が回収、調査しました。第三者に不自然にいじられたようなこれといった形跡もありません。指紋なんかも出ませんでした。まあ、書類の送信自体は不自然な操作の範疇には入りませんし、指紋も拭けば消えますから、白馬以外の誰かが白馬のパソコンを操作した可能性は拭い切れません」
霧島さんは鯛の刺身に箸をつける。たっぷりのワサビ醤油で口に運び、途端に悶絶する。
「辛っ！　すいません、『酢鯨』の冷を！」
私はすぐに棚から一升瓶を下ろす。
「携帯電話はどうでしたか？」
「白馬氏の遺体が身に着けていた背広の胸ポケットに入っていました。丸一日以上海水に浸かっていたのが災いして、指紋の採取どころかデータの修復も不可能でした」
「失礼します、『酢鯨』の冷になります」
「どうも。ああ、助かった」
霧島さんは一気にグラスを半分ほど空けた。
「白馬氏の死因に何か不審な点はありましたか？」
剱さんは山芋焼きを食べながら質問を続ける。
「いえ。明らかな溺死でしたし、肺の中の水も東京湾の海水でした。死亡推定時刻も２７日の夜と考えられ、特に不審な点はありません。胃の中はほぼ空で、薬物などにより無理矢理嘔吐させられた痕跡も見られませんでした。アルコールは検出されましたけどね」
「そうですか……」
剱さんは箸を止め、考え始めた。
「新潟市内の監視カメラには信濃が運転していたと思われる車の映像がありましたが、夜間の行動範囲が広かったのが少し気にかかります。信濃と白馬が来店した証言がとれた酒場からホテルには車なら楽に行ける距離なんですが。信濃いわく、『慣れない街でホテルへの帰り道が分からなくなった』とのことでした」
剱さんは黙って耳を傾けている。
「警察は、信濃への疑いを強めています」
「信濃ですか？　なぜ？」
「奥さんと離婚したんです。つい先日。奥さんに事情を聴いたところ、白馬との浮気の可能性が浮上しました。本人は否定していますし、まだ確証は得られていませんが。でも、白馬の遺留品のパソコンに、わずかながら信濃美佳との浮気が推察されるデータが残っていました。信濃が犯人だという説が濃厚になりつつあるんですが、白馬は明らかに東京湾で死んで、信濃にはアリバイがある。吉祥寺のご友人からも証言が取れました。状況証拠ばかりで物的証拠も無い。……剱さん、何か無いですか？」
剱さんはそれを聞くと、深い思考の海に潜っていった。しばらくして、注文のために呼び止められた。
「碓氷さん、梅チャーハンを」
「は、はい」
剱さんの目の輝きに気圧された私は、少し気後れして返事をした。

＊　　＊

湯気がもうもうと舞い立つ梅チャーハンを前に、剱さんは霧島さんの目をじっと見据えた。
「さて、霧島さん。三つ質問があります。一つ、仮に新潟で白馬が殺害されたとして、そうなると犯人は信濃以外ではありえませんね？」
「え……ええ。他にも調べを受けた人は何人かいますが、仮に新潟で白馬が殺害されたとなれば信濃にしか犯行は不可能です」
「なるほど、ではもう一つ。白馬の遺留品であるパソコンとモバイルバッテリーについてです。それらが回収された時点で、充電残量はどうなっていましたか？」
「ちょっと待って下さいね……えーっと……」
霧島さんは手帳を引っ張り出し、メモを探す。
「鑑識によると、いずれもほぼ満タンでした。白馬の自宅で双方を回収した時、どちらも充電器にささっていたわけではないので、いずれも前回の使用以後の純粋な残量と考えられます」
「そうですか。じゃあ、これが最後の質問です。２７日の上越新幹線の運行状況はどうでしたか？」
「確認します」
霧島さんは手帳のページをめくる。
「全て定刻通りでした」
剱さんはその言葉に満足げに頷き、梅チャーハンに手

を伸ばした。
「じゃあ、始めますか……」
＊　＊
「さて、結論から言ってしまいましょう。白馬を殺害したのは信濃です」
「おっと、いきなりですね」
霧島さんは驚きと期待を顔に出して、梅チャーハンを頬張る。口元に胡麻が残る。
「まず、トリックをお話します。そしてそれに基づいて証拠をお見せします」
剱さんはぬるくなった『高清水』を飲み干した。
「では、トリックから。用意するのは東京湾の海水を……そうですね、2リットルのペットボトルで2～3本あればいいでしょう。新潟出張に行く荷物に紛れさせて持っていくことは不可能ではありません。キャリーケースなら無理かもしれませんが、大きめのボストンバッグなら行けます。それをホテルに持っていきます。ホテルにチェックインした後、信濃は白馬を連れて酒場へと行きましたね？　これはしこたま酒を飲ませて、後で吐かせて胃の内容物をなくすことで死亡推定時刻を割り出しにくくするための工夫だと考えられます。薬物で嘔吐させたのでは体内から検出されて疑いを持たれかねませんが、アルコールは成人なら摂取することもあります。体内から検出されても不審がられることもありません。だからわざわざ下調べをして酒場へ行ったんでしょうね」
剱さんは霧島さんに空の徳利を振って見せた。
「レンタカーの行動範囲が広いって言っていましたが、それはわざと遠回りして車に酔わせて吐かせるためにやったんでしょう。とにかく吐かせて胃を空にさせたら準備完了。ここから泥酔させた理由も見えてきます。眠らせないと殺害するときに抵抗されますからね。酒で眠らせてしまえば、抵抗もしないし邪魔もしない。信濃は酒をじゃんじゃん飲ませるのに腐心したでしょうね」
「なるほどねえ……で、どうやって殺したんですか？」
霧島さんは感心したように手元のグラスを眺め、中身をあおって空にした。剱さんはその隙に梅チャーハンを大量に取り分ける。
「二人が泊まったホテルがどのような風呂場なのかは分かりませんが、恐らく栓をした洗面器、ないしは風呂桶に持参した海水を注ぎ、そこに白馬の頭部を突っ込んだんでしょう。これなら死因は溺死で説明がつきますし、あとで死体を処理するのに役に立ちます。信濃は白馬を殺害した後、死体を浴槽に漬けます。そこに水を張れば死体は冷やされ、死亡推定時刻を遅らせることができます。チェックアウトする直前に死体を引き揚げ、ビニールか何かでくるんでボストンバッグに詰めたらいい。白馬は小柄だということですし、死体の畳み方と鞄の大きささえ気を付けたら大丈夫でしょう。そして帰京し、レンタカーを返し、白馬の荷物を白馬の自宅に置き、東京湾に死体を棄てます。新潟のホテルで死体を水に漬けたため、死体はびしょ濡れのはずです。でも海に沈めてしまえばそんなことはばれるわけもなく、問題になりません。後は何食わぬ顔で吉祥寺の友達の家に行けばいい」
剱さんはここで一息つき、梅チャーハンを口に運ぶ。あんなに梅チャーハンを盛っていた大皿はかなりきれいになっていた。
「でも、白馬は東京の本社に顔を出すことになっています。だから信濃は白馬を偽って会社に連絡します。『風邪で休む』と。でも信濃はそれではまだ不安だったんでしょう。もう一捻り加えることにします。それが白馬のパソコンから送信された文書。いや、電話の時刻からだいぶ間が空いていることを考えると、単に後で文書の存在を思い出したのかもしれませんね。白馬のパソコンから送信された以上、白馬が送信したと普通は考えます。風邪をひいたくらいならパソコンでメールをすることは可能ですし、送信しない方がかえって不審がられると考えたのかもしれません。ですが、いずれにせよ今回の事件ではそれが仇と……墓穴を掘ることになりました」
「どういうことですか？」
霧島さんが堪え切れずに口を挟んだ。いつの間にか、私も釜田さんもこっそりと聞き耳を立てている。
「霧島さん、白馬のパソコンから本社にファイルが送信されたのは8時52分でしたね？」
「ええ、そうです」
「つまり、仮に白馬が生きて『Max とき310号』に乗っていたとしたら、新幹線の車内からファイルを送信したことになりますね？　でも、それはおかしいです。白馬のパソコンやモバイルバッテリーは老朽化が進んでいて、すぐ上がってダメになるような代物だったことは大山課長や信濃の発言から容易に想像できます。なのに、鑑識の調査ではパソコンもモバイルバッテリーもほぼ満タンだった。『Max とき310号』に使用される車両の座席にはモバイルコンセントがありませんから、外部からの電源供給も不可能。白馬は新幹線の車内でパソコンの操作をしなかった、と考えるのが自然でしょう。新潟へ向かう新幹線の車内では仕事をしていたのに、何で帰りの車内ではパソコンを触りもしなかったのでしょうね？」
「なるほど……でも、モバイルバッテリーなんて今時駅のキオスクとかコンビニでも売っていますよ？　そこで新しく買ったなんてことはないんですか？」

「確かに、それはそうかもしれません。ですが、もっと決定的な証拠があるんです。これを見てください。碓氷さんも釜田さんも見ませんか？　そこからでは聞こえにくいでしょう」
聞き耳を立てていたのがばれていたようだ。私は少しばつが悪い顔をしながら近寄った。釜田さんも私の後に続く。剱さんは私達にも見えるようにスマホの画面を見せてくれた。
「これ……時刻表ですか？」
私は剱さんに尋ねた。剱さんは頷く。
「上越新幹線『Max とき３１０号』の時刻です。ここを見て下さい。この列車は越後湯沢駅を８時４９分に出発します。越後湯沢駅を出た上り列車はすぐにトンネルに入ります。大清水トンネルというもので、全長は２２００メートル以上と非常に長い山岳トンネルです。駅を出たばかりのスピードが出ていない新幹線、さらに東京方面に向かって上り坂なので、通過するのに結構な時間がかかります。白馬のパソコンからファイルが送信された時刻、８時５２分時点で列車はトンネルの中にいます。トンネルの中は当然電波が届きません。どうやっても８時５２分に『Max とき３１０号』の車内からファイルを送信することは不可能なんです。じゃあ誰が白馬のパソコンからファイルを送信したのでしょうか？　それが可能だったのは一緒に新潟出張に行っていた信濃だけです」
話を終えた剱さんは、酒で喉を潤そうとコップを持った。しかしそれは既に空になっていた。
「釜田さん。『越乃寒梅』の冷を」
「え……あ、お、おう」
呆気に取られていた釜田さんは我に返り、厨房へと消えた。越乃寒梅……新潟の酒だ。
「動機も何となく想像がつきます」
剱さんは梅チャーハンの最後の一口を平らげて言った。
「白馬のパソコンは旧式で、そんなのでどうやって仕事をこなしていたのか大山課長が気にしていましたよね？　多分、白馬は仕事をこなしていませんよ」
霧島さんも私も一瞬、剱さんが言っていることが理解できなかった。
「旧式のオンボロパソコンで大量の仕事をさばけるわけがありません。ばれないように与えられた仕事を事あるごとに信濃に押し付けていたんでしょう、白馬は。それで不当な評価を得ていたことに日頃から信濃は不満だった。そこに信濃の妻と白馬の浮気……信濃の我慢も限界を超えたのではないでしょうか」
剱さんもさすがに疲れたのか、大きく伸びをした。
「ほれ、『越乃寒梅』、お待ちどお。話を聞かせてくれたお礼って言っちゃあ難だが、これはサービスだ」
釜田さんは酒の入ったグラスと一緒に里芋の煮っころがしの小鉢を出した。
「助かりました、恩にきります」
霧島さんはそう言い、電話をしに店の外へ消えた。事件を持ってきた警察の人に事の顛末を話すのだろう。
私の表情は硬くなっていた。誰にも……特に剱さんには悟られないように、そっと顔をそむけた。

＊　　＊

店じまいと明日の仕込みを終えて帰宅する。といっても、居酒屋と同じハイツの一室だ。
ドアを開ける。冷え冷えとした暗い部屋は、無人のはずなのにどこか違和感がある気がした。私はそれを無視して手洗いうがいを済ませ、朝の食器を片付けにかかる。
謎を解く剱さんの姿が頭にちらつく。
あの垂れ目から普段の優しさは、薄れていた。
とりとめもない思考のまま食器を洗い終える。頭上の食器棚にしまおうと、戸を開けた。
どばしゃっ、と何かが大量に降ってきた。視界が真っ白になり、急に呼吸が苦しくなる。
「ちょっと、何よこれ！　……小麦粉！？　もー……」
咳込みながら毒づく。ついていない。それにしても、こんなところに小麦粉なんて片付けただろうか？　私も台所も見事に真っ白だ。しょうがないから掃除機を取り出す。コードを伸ばし、プラグをコンセントに差す。スイッチオン。
爆発。

〈つづく〉

＊注…２０１３年３月２日、奥羽本線神宮寺～刈和野間で『こまち２５号』が脱線事故を起こした。乗客乗員に怪我は無かった。線路上に積もった雪に乗り上げたことが事故の原因とされた。現在、事故現場には防雪柵が設置されている。
＊注…本作に登場した大清水トンネルでは、２０１９年より携帯電話による通話サービスが利用可能である。なお余談ながら、並走する上越線の清水トンネルは、川端康成の小説『雪国』冒頭の「国境の長いトンネル」とされている。
＊本作品はフィクションです。本文中の人物、団体その他は現実と一切無関係です。
＊本作の時刻は交通新聞社『JR 時刻表　２０１３年５月号』から引用しました。
＊次回作『黄昏に星は瞬く（仮題）』は三文文誌秋号に掲載予定です。ご期待下さい。